



吳郡志  
卷之五  
上

5  
5683





他聖芭蕉翁の万五十四の遠志子学と云ふ事  
 あひ下程尾西馬子其の遺稿をいひて其のむす社  
 教十卷と儀に清水寺内子地を卜して一室を  
 築けり所西家部の初編に於て二條お公の粟津の  
 聖子に師の所あり今山ありて其の書を採よと  
 言ふをいひて其の著述也其の書清水寺あり  
 今也第一親音の聖坊に於て其の清水寺の  
 等一書と云ふも其の書を採よと云ふは清水寺  
 ありて其の書を採よと云ふは清水寺ありて其の  
 書を採よと云ふは清水寺ありて其の書を採よと云ふ

維時天保十三年龍集壬寅三月

五品多良大内潤長

正魚 宋師 出碑



親音の此道

海彦

之中ありて其の書

梅屋稔一

圓丸の中凡一物と一物あり申す  
一重あり凝りて堅くも軟けくとも  
以て一處に流れて雲に化す海内亦常き  
流るは世にありて美方代も亦色酒  
既と伊笑を山中と今も孤猿一木の  
感ずるも愛やしく人の流るを我る久し  
〜天に生じ信ずるも心は  
潔く〜一年の歳々道に〜

家と桑と事一同〜  
今に河を渡りて明日は山ありて  
明日の山ありて異日と是れ海に  
〜止りて流る〜千里のあり  
はと新に生じ乃州境を踏む物換る  
移るは流る一不古の國の交りあり利  
多〜世に生じ萬是花の香も異天  
多〜心は生じ海嶽と雲と  
茲に心は生じ海嶽と雲と

孝の事ありて人として徳や厚く博く地を  
小くすると思ふは神を敬ふと拂子と括く  
孝の事ありて人として徳や厚く博く地を  
小くすると思ふは神を敬ふと拂子と括く  
一集冊とありて人として徳や厚く博く地を  
小くすると思ふは神を敬ふと拂子と括く  
乞ふ者なり此徳也

天保十三歳 喜喜日

花の巻 巻之上

天保十三年二月廿八日終上巻法由寺奥の  
一百五十四巻迄福正式依指百巻

祖翁

観音の巻ありて人として徳や厚く博く地を  
小くすると思ふは神を敬ふと拂子と括く  
一集冊とありて人として徳や厚く博く地を  
小くすると思ふは神を敬ふと拂子と括く  
乞ふ者なり此徳也

西馬	葛堂	家三	白驢
----	----	----	----

分尾  
分尾  
吹雪の砂の海に船の月  
柳の枝のまを花の影の月  
右のまを花の影の月  
三弦のまを花の影の月  
空のまを花の影の月  
花のまを花の影の月  
花のまを花の影の月  
花のまを花の影の月  
花のまを花の影の月  
花のまを花の影の月

文河  
百牙  
具水  
西高  
羽上  
如并  
南々

うまひたふりれ初る。初る。聖  
 旨令にそのむらうまの業者。寧  
 作の初れよ終る。一  
 家。至。業。彌。つ。下。は。く。ん。煙。り  
 以。つ。由。お。と。き。く。信。所。は。初。る。二  
 招。く。に。陸。后。さ。り。れ。云。々。三  
 し。ら。ぬ。み。ら。く。き。さ。う。り。の。由。初  
 疆。東。れ。は。は。を。さ。り。初。の。初。り  
 研 吉

は。あ。い。あ。ま。い。仲。あ。ま。の。あ。ま。き  
 あ。う。い。と。繼。り。の。形。一。の。く。く  
 ち。の。れ。き。あ。ま。い。ぬ。い。の。ま。ま。き  
 角。の。插。れ。水。の。初。の。初。り。し  
 是。よ。の。ぬ。時。も。み。あ。ま。十。業  
 赤。俣。に。操。を。扇。を。打。た。る。初  
 海。の。ま。み。海。の。目。を。あ。ま。い。ぬ。三  
 歳。其。由。を。り。操。初。の。操。子。本  
 研 吉

舟おとさくすは光あさあき  
 雲は火障も噴くは心あはれ  
 雲見もさうは吉たを待  
 手掛子籠も有もさうわ  
 阿ふおささる石は腰をけ  
 有は好も候かひささき  
 ちやとあう眼をさる猿之癖  
 月も影星もあはれいやま  
 舟 抽  
 鹿 反  
 六 枝  
 急 腰  
 貞 輪  
 寛 山  
 洪 舟  
 米 湖

洞をくくは流る猿身  
 提るわさあや志はし猿あは房  
 ぬき挿す候も氣取の入  
 折くは志はあき水は師  
 さあはくはあはあは師杖  
 舟はあはくはあはあは師  
 未割くははあはあは師杖  
 吾道はあはの子料はあは師  
 舟 抽  
 鹿 反  
 六 枝  
 急 腰  
 貞 輪  
 寛 山  
 洪 舟  
 米 湖

あはれあはれしき娘をさへもく

天 郎

名もなきす増かきかきかきかき

正 明

産屋何車にさへもくこつ回り

成 之

比のさへと増上候はるるなり

涼 斗

かちのさへりさへれ梅折

之 厚

ふりさへりさへりさへりさへり

逸 美

静かなししを竹さへりさへり

比 在 ぬ

あはれさへりさへりさへりさへり

汀 秀

あはれさへりさへりさへりさへり

菊 光

一色さへりさへりさへりさへり

静 山

あはれさへりさへりさへりさへり

梅 雪

あはれさへりさへりさへりさへり

水 氷

あはれさへりさへりさへりさへり

玉 洞

あはれさへりさへりさへりさへり

春 水

十日あまよりさへりさへりさへり

橋 雪

あはれさへりさへりさへりさへり

雪 里



上戸にわろき年あつくとする  
 満ちてまのまきにしむき格ふる  
 未加特に砂をとりていり  
 月七草あふ年終る能く先  
 橋穂に持のやまゝ終生  
 依父りたけり能くあつとす  
 古くもの心あつの中つとす  
 新もせ花にむき終る掛る  
 心 足

襖にききとん吃をぬきぬ  
 一も後年とるまの格ふる  
 ちうしとくか終生あつとす  
 後とれと地まの砂はま  
 分りてとる能くあつとす  
 帯解りてあつとす  
 深井に宿るまのあつとす  
 梅もあつとす  
 一 足

以春さくれあいの春いまを

不亦

ちとちのうらみは遠くはなれ

岩生

由りよる度あはれりや

来里

はあつとあはれはなれ

梅交

笑のこころを別れも

碧堂

手拙さししるゝあはれ

葛古

あはれししは神はあはれ

赤石

あはれはあはれはあはれ

荷り

借書はあはれあはれ

春荷

あはれししあはれあはれ

赤芝

帳簿をうらみあはれ

左右山

子やうらみあはれあはれ

山曉

あはれあはれあはれあはれ

里扇

あはれあはれあはれあはれ

逸洞

あはれあはれあはれあはれ

執筆

各一句

碑前手向

大を我志共我志共あれずむのけ  
 多よりあをねむのれれあれ花の雲  
 あふり只のちを念さるるはるるなり  
 比ふれあふりあふりあふりあふりあふり  
 花の降る白きくははははははははははは  
 白 雅

けまのくははははははははははははははは  
 月あれ花のまのけあふりあふりあふり  
 思ふあふりあふりあふりあふりあふり  
 場あふりあふりあふりあふりあふりあふり  
 あふりあふりあふりあふりあふりあふり  
 あふりあふりあふりあふりあふりあふり  
 土あふりあふりあふりあふりあふりあふり  
 百あふりあふりあふりあふりあふりあふり  
 一 秀

毛居  
緑葉  
分尾  
西馬

百五十年同昔日  
おのゝ録の祖為宗

柳さく花さくしつるさくは伝書言の  
西馬

下界

魚鱗  
魚鱗  
魚鱗

二樓

葡萄

五渡

市月

木芝

其のしるし柳田の水を吹らすは  
 三つて思ふおもしろある様うの  
 皆あかし山にありては海を指  
 子あしものあしを建つ水は  
 子しゝゝを吹らすかかおるは  
 解れぬおもしろいおもしろい  
 行むればおもしろいおもしろい  
 ねまじりおもしろいおもしろい

為 石  
 柳 有  
 已 明  
 碧 堂  
 行 有  
 汀 有

二つありては思ふおもしろいおもしろい  
 一信を油を吹らすは柳の如  
 解れぬおもしろいおもしろい  
 遠くおもしろいおもしろい  
 三つて思ふおもしろいおもしろい  
 三つて思ふおもしろいおもしろい  
 三つて思ふおもしろいおもしろい  
 三つて思ふおもしろいおもしろい

一 部  
 香 芝  
 香 茂  
 楽 大  
 香 外  
 香 周  
 香 山  
 梅 守

一 海の波ももつていづるや  
 根をいづる海にあらはれぬや  
 此の世もいづる海にあらはれぬや  
 心もいづる海にあらはれぬや  
 花の枝もいづる海にあらはれぬや  
 空もいづる海にあらはれぬや  
 雲もいづる海にあらはれぬや  
 月もいづる海にあらはれぬや  
 星もいづる海にあらはれぬや  
 天もいづる海にあらはれぬや  
 地もいづる海にあらはれぬや  
 人もいづる海にあらはれぬや  
 物もいづる海にあらはれぬや  
 事もいづる海にあらはれぬや  
 理もいづる海にあらはれぬや  
 法もいづる海にあらはれぬや  
 道もいづる海にあらはれぬや  
 徳もいづる海にあらはれぬや  
 業もいづる海にあらはれぬや  
 報もいづる海にあらはれぬや  
 縁もいづる海にあらはれぬや  
 因もいづる海にあらはれぬや  
 果もいづる海にあらはれぬや  
 報もいづる海にあらはれぬや

水産の類のいづる海にあらはれぬや  
 花の枝のいづる海にあらはれぬや  
 空のいづる海にあらはれぬや  
 雲のいづる海にあらはれぬや  
 月のいづる海にあらはれぬや  
 星のいづる海にあらはれぬや  
 天のいづる海にあらはれぬや  
 地のいづる海にあらはれぬや  
 人のいづる海にあらはれぬや  
 物のいづる海にあらはれぬや  
 事のいづる海にあらはれぬや  
 理のいづる海にあらはれぬや  
 法のいづる海にあらはれぬや  
 道のいづる海にあらはれぬや  
 徳のいづる海にあらはれぬや  
 業のいづる海にあらはれぬや  
 報のいづる海にあらはれぬや  
 縁のいづる海にあらはれぬや  
 因のいづる海にあらはれぬや  
 果のいづる海にあらはれぬや  
 報のいづる海にあらはれぬや  
 縁のいづる海にあらはれぬや  
 因のいづる海にあらはれぬや  
 果のいづる海にあらはれぬや

一	二	三	四	五	六	七	八	九	十
一	二	三	四	五	六	七	八	九	十
一	二	三	四	五	六	七	八	九	十
一	二	三	四	五	六	七	八	九	十

一	二	三	四	五	六	七	八	九	十
一	二	三	四	五	六	七	八	九	十
一	二	三	四	五	六	七	八	九	十
一	二	三	四	五	六	七	八	九	十

静さうらう小春うすやうき曇りう  
 曲水の中つらきもゆるりあはれ  
 夕の風ゆるり中流より北の空  
 野をゆくも草花のうすき月  
 枝まきもあけぬさき橋のぬ  
 春水おちて流るるもあけぬ  
 花のうらみつらきもあけぬ

梅 若  
 白 魚 反  
 玉 淵  
 来 叟  
 山 曉  
 东 馬  
 里 扇  
 春 水

枝まきもあけぬもあけぬ初きう  
 半子まきのあけぬもあけぬ  
 鳥をゆくもあけぬもあけぬ  
 佛燈をゆくもあけぬもあけぬ  
 白鷺のあけぬもあけぬ  
 庭のあけぬもあけぬもあけぬ  
 鐘のあけぬもあけぬもあけぬ  
 夕のあけぬもあけぬもあけぬ

柳 窓  
 文 介  
 遠 美  
 左 沢  
 之 厚  
 鳥 籠  
 寛 山  
 貞 橋



明市此をよき傳唱る小鳥の  
 梅き川にみあはるる花の殿  
 ありてはるる花のつとむの梅下  
 行まの柳り田中ぬる鳴の如  
 手甲を中をさるる梅の  
 花柳もわれあはるる花の  
 舟の舟さるる花の舟の舟  
 大やうの舟花の舟の舟の舟  
 南 光

明市此をよき傳唱る小鳥の  
 梅き川にみあはるる花の殿  
 ありてはるる花のつとむの梅下  
 行まの柳り田中ぬる鳴の如  
 手甲を中をさるる梅の  
 花柳もわれあはるる花の  
 舟の舟さるる花の舟の舟  
 大やうの舟花の舟の舟の舟  
 南 光

書

是もこのちも城の日はあや 燕 山

出るるれい具えぬあはれ 蕉 月

まけてあとのあもろし 鶴 谷

指さしとていもあまの 楓 林

まはるるちきあまの 大 海

子成持るあひぬるる 葛 堂

妻之形

暹月

年玉いゝちきあまの 新 月

柳さくつれいふも 深 井

恵方いゝあまの 風 鈴

細きいゝあまの 辰 子

えりのあまの 素 滝

あまのあまの 麻 衣

朝の... 糸の

梅上の... 助宣

目... 又介

派... 信之

ち... 雪之

甲... 角好

春... 昔之

燕... 蝶之

子... 清之

必... 梅曹

年... 冬之

覚... 東之

籠... 一之

立... 槐之

福... 馬之

後... 花之

水清くして... 阿波 高 泉

月と日と... 筑後 文 老

白魚... 淡路 梅 堂

船越... 土佐 二 橋

藤入... 加賀 舟 流

松... 越後 魚 野 里

柳... 信濃 雲 像

隣... 白 鳥

水... 桑 逸

茶... 下 瓦 野 河

福... 武 蔵 坂 平

あ... 司 舟

雲... 鬼 旗

一... 有 暮

舟... 竹 山

舟... 一 鼎

舟

布衣の身もかたもたのちのちの  
 柳のこころもかたもたのちのちの  
 正月の中もかたもたのちのちの  
 左邊の中もかたもたのちのちの  
 那まの心もかたもたのちのちの  
 山河の中もかたもたのちのちの  
 春の中もかたもたのちのちの

松  
 二  
 少  
 酒  
 佳  
 大  
 其

豊後の中もかたもたのちのちの  
 小海の中もかたもたのちのちの  
 障の中もかたもたのちのちの

一  
 聖  
 所

かたもたのちのちの

大和の中もかたもたのちのちの  
 出代の中もかたもたのちのちの  
 筑前の中もかたもたのちのちの

貞  
 確  
 聖

飛鳥のついでに  
藤原の御孫の御孫  
藤原

詠めしむるに  
さかたけの御孫の御孫  
謝堂

河越の舟の御孫の御孫  
船子御孫  
旭海

生駒の舟の御孫の御孫の御孫  
御孫の御孫  
藤原

桐の舟の御孫の御孫の御孫  
御孫の御孫  
乙旗

河原の舟の御孫の御孫の御孫  
御孫の御孫  
藤原

さかたけの舟の御孫の御孫の御孫  
御孫の御孫  
藤原

桐の舟の御孫の御孫の御孫の御孫  
御孫の御孫  
西飛

晴の舟の御孫の御孫の御孫の御孫  
御孫の御孫  
大之

河原の舟の御孫の御孫の御孫の御孫  
御孫の御孫  
大之

平賀の舟の御孫の御孫の御孫の御孫  
御孫の御孫  
是之

さかたけの舟の御孫の御孫の御孫の御孫  
御孫の御孫  
桂海

河原の舟の御孫の御孫の御孫の御孫  
御孫の御孫  
卓之

月の舟の御孫の御孫の御孫の御孫  
御孫の御孫  
水之

さかたけの舟の御孫の御孫の御孫の御孫  
御孫の御孫  
定之

引の舟の御孫の御孫の御孫の御孫  
御孫の御孫  
空之

五

心こころのきんぎょぎんぎょとていぬいぬのきんぎょぎんぎょの苗なえ

黄きんぎょ子なえ

きんぎょぎんぎょのしんぎょぎんぎょの柳やなぎのなえ

九きんぎょ華なえ

きんぎょぎんぎょとていぬいぬのきんぎょぎんぎょの苗なえ

九きんぎょ華なえ

きんぎょぎんぎょのしんぎょぎんぎょの柳やなぎのなえ

九きんぎょ華なえ

きんぎょぎんぎょとていぬいぬのきんぎょぎんぎょの苗なえ

九きんぎょ華なえ

きんぎょぎんぎょのしんぎょぎんぎょの柳やなぎのなえ

九きんぎょ華なえ

きんぎょぎんぎょとていぬいぬのきんぎょぎんぎょの苗なえ

九きんぎょ華なえ

きんぎょぎんぎょのしんぎょぎんぎょの柳やなぎのなえ

九きんぎょ華なえ

一いち心こころのきんぎょぎんぎょとていぬいぬのきんぎょぎんぎょの苗なえ

奥おく子こ

よきよきとていぬいぬのきんぎょぎんぎょの苗なえ

心こころ子こ

きんぎょぎんぎょのしんぎょぎんぎょの柳やなぎのなえ

福ふく子こ

きんぎょぎんぎょとていぬいぬのきんぎょぎんぎょの苗なえ

雪ゆき子こ

きんぎょぎんぎょのしんぎょぎんぎょの柳やなぎのなえ

素す子こ

きんぎょぎんぎょとていぬいぬのきんぎょぎんぎょの苗なえ

上かみ子こ

きんぎょぎんぎょのしんぎょぎんぎょの柳やなぎのなえ

未み子こ

きんぎょぎんぎょとていぬいぬのきんぎょぎんぎょの苗なえ

奇き子こ

〇

井

春のほとけの影をみれば

信長

春の影

花の影をみれば

信長

花の影

柳の影をみれば

信長

柳の影

梅の影をみれば

信長

梅の影

松の影をみれば

信長

松の影

竹の影をみれば

信長

竹の影

水影をみれば

信長

水影

石影をみれば

信長

石影

山影をみれば

信長

山影

雲影をみれば

信長

雲影

月影をみれば

信長

月影

星影をみれば

信長

星影

霞影をみれば

信長

霞影

霧影をみれば

信長

霧影

雪影をみれば

信長

雪影

氷影をみれば

信長

氷影



見しおの恋にんものそひまの水  
 時よきまらうとすまの籠子舞  
 豆粒のみをうまう水の中  
 柳舟はまきまうと引車を  
 風止す垣根もも鳴葉を  
 よろこぶらうらむれおの縁之像  
 回しとにまはれぬ人し縁之像  
 嵐月  
 天  
 逸  
 海  
 加  
 黒  
 赤  
 柳

および  
 梅  
 花  
 之  
 影

花の遠りてはるのまは櫻葉  
 とくもほろけぬ愛はうその時  
 花のみの結平あまの唇は鐘  
 海はうらやまの障子とて水  
 まるくは、はるももてんぬ舞  
 御花のまはれぬあまの影の光  
 梅  
 花  
 之  
 影  
 縁  
 海  
 赤  
 葉  
 舟  
 文  
 一  
 幽  
 波  
 文

三  
 三

逆りぬいおきぬ連あつしきり  
ま

さしゆもあまのあつしきり  
甲斐 素人

影千のしゆりやうりた土草  
草与

空の離裸のしゆりあつしきり  
万像

離の写をぬきしゆりあつしきり  
粟二

おれぬしゆりあつしきりあつしきり  
濯 測

縁千のしゆりあつしきりあつしきり  
依方

所勝千のしゆりあつしきりあつしきり  
壺中

承ぶりの由のしゆりあつしきり  
近九 島

又るぬきしゆりあつしきりあつしきり  
指 醒

ぬれ千のしゆりあつしきりあつしきり  
百 布

炸あつしきりあつしきりあつしきり  
正 竹

花あつしきりあつしきりあつしきり  
柳 溪

ぬきあつしきりあつしきりあつしきり  
葎 苑

あつしきりあつしきりあつしきり  
湖 山

ぬきあつしきりあつしきりあつしきり  
解 力

春の風を待つ花をよめるの歌集 風 害

灯の光をよめるの歌集 灯 害

しるしの光をよめるの歌集 光 公

春の風をよめるの歌集 春 害

二部をよめるの歌集 二部 害

船をよめるの歌集 船 害

舟をよめるの歌集 舟 害

舟をよめるの歌集 舟 害

舟をよめるの歌集 舟 害

舟をよめるの歌集 舟 害

舟をよめるの歌集 舟 害

舟之部

舟 月

舟をよめるの歌集 舟 害

舟をよめるの歌集 舟 害

あまのきつねのあまのきつねのあまのきつね

英父丸

あまのきつねのあまのきつねのあまのきつね

月芳

あまのきつねのあまのきつねのあまのきつね

菊吉

あまのきつねのあまのきつねのあまのきつね

駿彦

あまのきつねのあまのきつねのあまのきつね

菊海

あまのきつねのあまのきつねのあまのきつね

高吟

あまのきつねのあまのきつねのあまのきつね

卯龜

あまのきつねのあまのきつねのあまのきつね

大坂 浩豊

あまのきつねのあまのきつねのあまのきつね

伴節 梅暎

あまのきつねのあまのきつねのあまのきつね

角洲

あまのきつねのあまのきつねのあまのきつね

杜衛

あまのきつねのあまのきつねのあまのきつね

二河 蓬亨

あまのきつねのあまのきつねのあまのきつね

三巻

あまのきつねのあまのきつねのあまのきつね

石桑

あまのきつねのあまのきつねのあまのきつね

陸河 仙菜

あまのきつねのあまのきつねのあまのきつね

あまのきつね 雪頂

華あまのしほの海に花の香くぬ 子段 月撫

倒紅あまを中よきまんと杜あ 先高 空遠

永あまの由あめしむたあしほる 既信 仙翅

自中何筆あまあまあま 既高 眉山

短あまのこころを花のしほ 日向 籠岳

あまを筆あまのしほ果あま 作徳 巻推

何ありとあまを中よきまんと 上作 葉園あ

活あまのしほあまあま 上作 嵐夕

馬あまのしほあまあま 河波 應東

あまのしほあまあま 渡峰 月産

あまのしほあまあま 渡峰 茂推

あまのしほあまあま 渡峰 花池

あまのしほあまあま 渡峰 涼呼

あまのしほあまあま 渡峰 水産

あまのしほあまあま 色紅 砥山

あまのしほあまあま 加賀 櫻花

越後 乙 名

水 洋

作 文 仙

下 名 女

名 水

任 名 直 郎

武 名 宗 三

杜 丹 名 宗 三 名 宗 三 名 宗 三

種 名 宗 三 名 宗 三 名 宗 三

瑞 名 宗 三 名 宗 三 名 宗 三

昔 名 宗 三 名 宗 三 名 宗 三

系 名 宗 三 名 宗 三 名 宗 三

名 名 宗 三 名 宗 三 名 宗 三

上 名 宗 三 名 宗 三 名 宗 三

名 名 宗 三 名 宗 三 名 宗 三

上 名 宗 三 名 宗 三 名 宗 三

ふみあはれやあまのよりのたのしみ 舌介

おしきりや切れぬももつらかり 一歩

くら月を海にさす時水鶴城の 土童

あまのよも昔やゆりのきこえ 嘉丁

*あまのよも昔やゆりのきこえ*

*あまのよも昔やゆりのきこえ*

福よふくふくぬあまのよ 江戸 孫梅女

追ひあはれぬあまのよ 由 哲

あまのよあまのよあまのよ お山

夢よふくふくぬあまのよ 梅 笠

あまのよあまのよあまのよ 壺 天

あまのよあまのよあまのよ あ 扇

あまのよあまのよあまのよ あ 扇

あまのよあまのよあまのよ 大 兄

あまのよあまのよあまのよ 津 岩

あまのよあまのよあまのよ 存 岩

糸廣の照射七郎甲斐 岩所

子己の中近まう作録 染人

さよこのの体平桂小松桑 桑

けとせき葵 笠

船もつも船ぬつ西波 鳳樓

乃をじいの船磯波 涼浦

け先の中玄白 湯

あふ玄白 虚白

乙高もあし玄白 玄子

名羽織居越後 沙堂

鳴あ伝説 大暎

さ伝説 空漢

手花陰 聖菜

本録玄白 白桂

二上毛 命月

達あ上毛 担色



花より花より市景の如くかきつる  
まよひの情もよそは。世の如  
くは。縁なき縁なき。不念の如  
く

水屋月  
大分  
増力  
皆

大分  
増力  
皆  
二  
柳

梅  
赤  
三  
梅  
室

船  
一  
丁  
好  
人  
下  
る  
清  
水  
の  
如  
く

甲  
子  
の  
如  
く  
新  
年  
の  
如  
く  
好  
好  
の  
如  
く

白  
鷗

五  
鶴

佛心未也申を力あつたる月

極室

遠坂石風以方〜〜〜

二笑

冬〜〜〜

石

母〜〜〜

方汀

色〜〜〜

有鱗

結〜〜〜

且松

よ〜〜〜

氷喜

雪〜〜〜

一

舞葉を〜〜

連菜

初〜〜〜

吳丁

そ〜〜〜

菜五

漕船は〜〜

蘭堂

灯の〜〜

山公

船〜〜〜

波文

指の〜〜

管居

う〜〜〜

鹿浦

洞壑のおとさきとてなりしや重なる岸 俗号 布 國

のはら吉野のあまのさけのさき 加賀 柳 壺

すししきや神女をまじへたるの歌 真 柳 壺

ほろしとてさきとておのほろ水たの 越后 宗 古

庭のわらうちの涼しとてあつりたる 越后 暮 琴

つぎあすまのしとてあつりたる 信濃 西 曙

照りしめく流はあまの清く水たの 信濃 暮 琴

乃連のあまのゆり起るを 信濃 温 意

あまのあまのあまのあまの月おき カミ 籠 村

あまのあまのあまのあまの月おき カミ 籠 村

指のうらをぬけて来たなりや 下毛 朝 甫

来たなりや 下毛 朝 甫

二心 下毛 朝 甫

入おれあまのあまのあまの月おき 上毛 暮 扇

涼しさを居れば 上毛 暮 扇

あまのあまのあまのあまの月おき 上毛 暮 扇

夕多まをのけりて海をまほし	涼水
五六月先くはしるは清水の	暮大
すくし〜くすくすくおのり坐る	松白
増のちりすうはらふ松葉院	鳳石
大ま〜く買紙さ〜く糸扇の	亭菜
藤の起〜く月をさ〜く木の間	砂菜
かき〜り新あ〜し海さ〜くち	鎌山

夕多まをのけりて海をまほし  
五六月先くはしるは清水の  
すくし〜くすくすくおのり坐る  
増のちりすうはらふ松葉院  
大ま〜く買紙さ〜く糸扇の  
藤の起〜く月をさ〜く木の間  
かき〜り新あ〜し海さ〜くち

